



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ユカギール諸語における変・様格
Author(s)	長崎, 郁; Nagasaki, Iku
Citation	北方言語研究, 16, 57-75
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99337
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99337
Type	departmental bulletin paper
File Information	05_Nagasaki.pdf



ユカギール諸語における変・様格*

長崎 郁
(名古屋大学)

キーワード：コリマ・ユカギール語、ツンドラ・ユカギール語、変・様格

1 はじめに

本稿では、ユカギール諸語に属する2つの言語、コリマ・ユカギール語 (Kolyma Yukaghir, KY) とツンドラ・ユカギール語 (Tundra Yukaghir, TY) における変・様格接語の用法を記述する。変・様格接語の形式は表1に示すとおりである。コリマ・ユカギール語には末尾子音の異なる2つの形式がある。

表1 コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語の変・様格接語

コリマ・ユカギール語 (KY)	= (η) ōn
	= (η) ōt
ツンドラ・ユカギール語 (TY)	= η ol/=uol

変・様格接語に関する詳しい記述は未だなされていない。Maslova (2003a, b) などの先行研究は代表的な用法とその用例を挙げるのみで、2つのユカギール語それぞれにおける用法の全体像、両者の違いを把握できる状況には至っていない。本稿の主要な目的は、ユカギール諸語の変・様格に関する記述を深化させることにある。

以下、第2節で変・様格接語の名称および起源と成立過程について述べる。第3節では、コーパスから収集した用例の検討結果に基づき、コリマ・ユカギール語、ツンドラ・ユカギール語の順に変・様格接語の用法を示す。最後に第4節において第3節のまとめを行い、加えてユカギール諸語の変・様格と類似の機能と意味をもつ近隣諸言語の名詞屈折形式について触れる。

2 名称、起源と成立過程

ユカギール諸語の初期の記述研究である Krejnovich (1958) は、ツンドラ・ユカギール語とコリマ・ユカギール語の古資料 (後述) における = η ol/=uol を名詞の “forma prednaznachenija predmeta” (予定形) と呼んでおり、格形式とは見なしていない。= (η) ōn と = (η) ōt (KY)、= η ol/=uol (TY) を格形式としているのは、Maslova (2003a, b) および Nikolaeva (2024) であり、前者は “transformative” (変格)、後者は “essive” (様格) と呼んでいる。筆者もこれらは格形式であると考え。形態構造上、「名詞語幹 (– 複数) (–3 人称所有) – 格」の「格」の位置にほかの格形式と相補的に現れることがその理由である。ただし名詞類の中でも固有名詞や代名詞にこれらの形式が接続することはない。また、ほかの格形式が接辞であるのに対して、これらの形式は

*本研究は、科研費 (課題番号 23K00480、21H04346、24K03853、25K00457) の支援を受けて行われた。

接辞と語の中間的な形式である接語と考えられる。接続の際に語の音素配列規則に従わない母音連続を生じうるからである。例えば、=(η)ōn と =(η)öt (KY) では、先行要素が短母音で終わる際に nume=ηöt [house=TRNSFESS] のようにそのまま /η/ を伴った形が付いたり、terike-d=ōn [wife-POSS.3=TRNSFESS] (-d < -de) のように母音を脱落させた上で /η/ を伴わない形が付いたりするが、稀に、t'uge=öt [track=TRNSFESS] のように語幹末の母音が保持されたままで /η/ を伴わない形が付き、結果として「短母音 + 長母音」という連続ができることがある。

変格および様格と呼ばれる格はウラル語族に存在し、“Usually, essives function as nominal or adjectival secondary predicates with the meaning of a temporary role or state, roughly equal to ‘as (a/the teacher, child, etc.)’” (通常、様格は概ね ‘as (a/the teacher, child, etc.)’ と等価な一時的な役割や状態を表す名詞的・形容詞的二次述語として機能する)、“In many Finnic languages, such as Finnish, the essive has a static meaning while another case, translative, is mostly used as its dynamic, directional counterpart.” (フィンランド語など、多くのフィン語派の言語において様格は静的な意味をもつが、もうひとつの格である変格は通常、その動的あるいは方向的な対応物である) と説明される (Kittilä et al. 2022: 892)。次節で見るように、=(η)ōn と =(η)öt (KY)、=ηol/=uol (TY) はウラル語族の様格と変格の両方に重なる意味をもつ。よって、本稿では変・様格 (transformative-essive) という名称を使うことにする。

変・様格接語はコピュラ動詞 (η)ō- (KY) ~ηol/=uol- (TY) を起源とすることが指摘されている (Maslova 2003a; Nikolaeva 2024)。ツンドラ・ユカギール語の =ηol/=uol はコピュラ動詞がほぼ音形を変えずに格形式として文法化したと考えられる。一方、コリマ・ユカギール語の変・様格接語 =(η)ōn と =(η)öt に関して、Maslova (2003a: 126) は、「コピュラ動詞 (η)ō- + 副詞派生接辞 -n」、「コピュラ動詞 (η)ō- + 同主語副動詞接辞 -t」に由来すると分析している。

コリマ・ユカギール語において、形態的構造の異なる 2 つの形式がそれぞれ文法化し、同一の格を表すと見なさざるを得ない状況に至った理由は不明である。ただし、古資料からは、=(η)ōn の方がツンドラ・ユカギール語の =ηol/=uol に対応する形式であることが推定される。コリマ・ユカギール語には Jochelson (1900) などの、19 世紀末に記録された比較的まとまった量のテキスト資料があるが、この資料中の変・様格の形式としては、ツンドラ・ユカギール語と同形の =ηol/=uol に類するものと、現在のコリマ・ユカギール語にも存在する =(η)öt に類するものしか確認できない。つまり、=(η)ōn に類する形式は 19 世紀末の資料には記録されていない。このことから、まず =(η)öt が =(η)ōn よりも早い時期に成立していたこと、=(η)ōn の方はより後になってから =ηol/=uol に置き換わる形で使用されるようになったものと考えられる¹。

¹ コリマ・ユカギール語のコーパスでは、「2 回目」の意味で ataqlēštōn と ataqlēštōl という 2 つの形が見られるが、後者の末尾の ol は、古い変・様格接語の残存と考えられる。数概念を表す句に変・様格接語が現れる場合については、3.1.4 を参照されたい。

3 変・様格接語の機能と意味－コーパス調査を基に

変・様格接語の用法を検討するために、本稿ではコリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語のそれぞれについて、複数の研究者によって 1950 年代以降に記録されたテキストをコーパス化し、用例を抽出した。コリマ・ユカギール語のコーパスは、Krejnovich (1982)、Nikolaeva (1989a, b)、Maslova (2001)、Nikolaeva & Mayer (2004)、Nagasaki (2023) を出典とする 136 篇のテキストから成る。ツンドラ・ユカギール語のコーパスは、Maslova (2001)、Kurilov (2005) を出典とする 51 篇のテキストから成る。また、ツンドラ・ユカギール語については、ユカギール語・ロシア語辞書である Kurilov (2001) の中の例文も検討対象とした。コーパスから得られた用例を自動詞節と他動詞節に分けて集計した結果は表 2 のとおりである。

表 2 コーパスにおける変・様格接語の用例数

		自動詞節	他動詞節	計
コリマ・ユカギール語 (KY)	= η ōn	24	39	63
	= η ōt	132	3	135
ツンドラ・ユカギール語 (TY)	= η ol/=uol	6	85	91

コリマ・ユカギール語の = η ōn では自動詞節と他動詞節の割合がおおよそ 4 対 6 であるのに対して、= η ōt では他動詞節は非常に少ない。一方、ツンドラ・ユカギール語の = η ol/=uol では自動詞節が非常に少ない。

3.1 コリマ・ユカギール語

3.1.1 kude-「なる」の項となる場合

コリマ・ユカギール語において、変・様格接語を伴った名詞句（以下、変・様格名詞句）と共起する動詞の中で最も用例数が多いのは自動詞 kude-「なる」であり、= η ōt では 116 例、= η ōn では 15 例とかなりの数にのぼる。Maslova (2003a: 126, 448–450) は、kude- を変・様格名詞句と共起する代表的な動詞の 1 つに挙げている。

自動詞 kude- と共起した変・様格名詞句の意味は大きく 2 つに分けられる。1 つは「主語の変化結果」である。例えば (1a) のような主語の指示対象が変容あるいは成長した姿や、(1b) のような主語の指示対象が得た役割（親族関係などの他者との関係、社会的な地位、用途）は変化結果と捉えることができる。また、(1c) と (1d) のように、変容した姿が類似物を用いて比喩的に示されたり、名詞の表すものによって覆われた状態として示されることもある²。

- (1) a. tintan šöj-pe-gi āj t'ul'd'i pulut= η ōn kude-j.
aforementioned stone-PL-POSS.3 again ogre=TRANSFESS become-INTR.3SG
「その彼らの石は再び人喰い鬼に変身した」(Nikolaeva 1989a: 82)

²出典のキリル文字表記はラテン文字に転写した。出典がラテン文字表記である場合、記録者により表記の細部に若干の違いがあるが、統一は最低限にとどめた。形態素境界とグロス筆者によるものである。

- b. **taŋ odu-n pulej=ŋōt gude-l=ben³ ...**
 that Yukaghir-GEN son.in.law=TRNSFESS become-AN=NMLZ
 「そのユカギールの家族の婿になった者は…」 (Maslova 2001: 134)
- c. **i tolt’i-dele lepjoshka=ŋōt kudie-nu-j⁴.**
 and(Rus.) beat-SS.ANT flatbread(Rus.)=TRNSFESS become-IPFV-INTR.3SG
 「そして（その茹でた魚の身を）叩くと、（それは）パン生地のようになる」 (Nagasaki 2023: 152)
- d. **pol t’umu ōžī=ŋōt kude-j.**
 floor(Rus.) all water=TRNSFESS become-INTR.3SG
 「床中が水浸しになった」 (Nagasaki 2023: 135)

もう1つは「生起した事態」である。この場合に変・様格接語を伴う名詞には、(2a, b) の時間・時期名詞（「夜」「朝」「春」「秋」など）や、(2c) の期間名詞（「基数詞＋日」「基数詞＋年」など）のほかに、事象名詞（「戦争」「洪水」「革命」「ソビエト政権」など）、天候名詞（「風」「吹雪」など）などがある。変・様格名詞句が生起した事態を表す場合、節中の主語に相当する内容は先行文脈から特定することができず、多くの例で主語名詞句を欠く。しかし、(2a) のように、虚辞的な主語として *pen* が現れることがある（グロスを ‘thing’ としておく）。

- (2) a. **pen joule=ŋōt kude-j.**
 thing evening=TRNSFESS become-INTR.3SG
 「夜になった」 (Maslova 2001: 146)
- b. **emil=ŋōn kude-tə-j**
 night=TRNSFESS become-FUT-INTR.3SG
 「夜中になるだろう」 (Nikolaeva & Mayer 2004: 31-12)
- c. **ataqu-n chas=ŋōt kude-j.**
 two-GEN hour(Rus.)=TRNSFESS become-INTR.3SG
 「2時間経った」 (Nikolaeva 1989b: 20)

以上の例に見るように、*kude-*「なる」と共起した変・様格名詞句は、主語の変化結果を表す場合も生起した事態を表す場合も、常に述語動詞の直前に置かれており、その生起位置に制限があるものと考えられる。

³*kude-*「なる」は語頭子音の有声化した *gude-* として現れることが稀にある。ツンドラ・ユカギール語ではさまざまな動詞や名詞の語頭の無声阻害音が任意的に有声化するが、コリマ・ユカギール語ではこの *kude-*「なる」以外では観察されない。

⁴語幹末の短母音（/u/ と /i/ をのぞく）は不完了の -nu など、いくつかの接辞が付く際に /ie/ または /ā/ に交替することが多い。/ie/ と /ā/ のどちらに交替するかは、語幹の第一音節の母音が「前舌」（/e, ö, u, i/）か「後舌」（/a, o, u, i/）かで決まる（/u/ と /i/ が「前舌」なのか「後舌」なのかは語彙的に決まっている）。

3.1.2 ā-, nugede-, ujī- 「する、作る」の項となる場合

「する、作る」の意味をもつ他動詞 ā-, nugede-, ujī- は、前節で見た kude- と並んで、Maslova (2003a: 448–450) によって変・様格名詞句をとる代表的な動詞とされている⁵。これらの他動詞と共起した変・様格名詞句は「目的語の変化結果」を表す⁶。

- (3) a. tamun-gele āj legi-te-t šoromo=ŋōn nugede-nu-l'el-ŋā.
that.one-ACC again eat-CAUS-SS.CIRC person=TRNSFESS make-IPFV-INFR-PL.TR.3
「(彼らは) 彼を [その痩せ細った人を] 食べさせて、再び人間らしくしたものだ」
(Nikolaeva 1989a: 20)
- b. (...) taŋtenj uŋžōd'e-n'ā-nu-l pulut-kele titte t'omōd'e=ŋōn
that dream-PROP-IPFV-AN old.man-ACC 3PL.GEN leader=TRNSFESS
ā-l'el-ŋā.
make-INFR-PL.INTR.3
「(...) (彼らは) その預言者の老人を自分たちの首領にした」(Maslova 2001: 137)
- c. n'ās'e qār-de-jle moho=ŋōn ā-m.
face fur-POSS.3-ACC hat=TRNSFESS make-TR.3SG
「(彼女は) その [そのウサギの] 顔の毛皮で帽子を作った」(Nikolaeva 1989a: 54)
- d. čou-nu-llə čou-nu-llə kaša=ŋōn ujī-m.
cut-IPFV-SS.ANT cut-IPFV-SS.ANT gruel(Rus.)=TRNSFESS make-TR.3SG
「(彼女は樹皮の裏側の柔らかい層を削りとして、それを) 切り刻んで粥を作った」
(Nikolaeva & Mayer 2004: 29-31)
- e. tintan terike-gele kimnī t'umu leppul=ŋōn ā-m.
aforementioned old.woman-ACC whip all blood=TRNSFESS make-TR.3SG
「そのおばあさんを鞭はすっかり血まみれにした」(Nikolaeva 1989a: 66)

これらの例において変化結果と捉えうる意味は、kude- 「なる」と共通している ((3a) と (1a)、(3b) と (1b)、(3e) と (1d) を対照されたい)。(3c, d) の目的語と変・様格名詞句は言わば「材料」と「作成物」のような関係にあるが、「作成物」は「材料」の変容した姿とも獲得した役割とも

⁵ā- と ujī- には本稿で示した例のほかに、「何をしたのか」「このようにする」のような文において「する」の意で用いられた例があるが、nugede- にはこのような例がないなど、3つの他動詞の間には何らかの意味的な違いがあるようだが、今のところはっきりとは分かっていない。

⁶コリマ・ユカギール語もツンドラ・ユカギール語も主語および目的語に現れる標識は一樣でない。大雑把にまとめると、(A) 自動詞主語・他動詞主語はどちらも基本的には主格（ゼロ格）に置かれる、(B) 主節における目的語は主語と目的語の組み合わせが1・2人称と3人称であれば主格（ゼロ格）に置かれ、そうでなければ対格などの何らかの明示的な格標識を伴う、(C) 従属節では目的語が主語との人称の組み合わせとは無関係に主格（ゼロ格）に置かれることがある、(D) 主節の自動詞主語あるいは他動詞主語は焦点標識を伴うことがあるが、この標識は格標識とは両立しない、となる。

捉えられる。ただし、以下に見るように、同じ動詞で目的語が「作成物」を示すことがある。その場合、「材料」は奪格名詞句あるいは具格名詞句によって示すことができるようである。

- (4) a. **loškərā-pə** **šobohərā-pə** ā-mək?
wooden.spoon-PL wooden.plate-PL make-TR.2SG
「(お前は) スプーンと皿を作ってくれるか?」(Nikolaeva & Mayer 2004: 15-6)
- b. tabud-e **lodka** ā-k
that.one-INS boat(Rus.) make-IMP.2SG
「それでボートを作れ」(Nagasaki 2023: 95)

他動詞 ā-, nugede-, uji- 「する、作る」と共起した変・様格名詞句も、kude- 「なる」と同様に、述語動詞の直前に生起するという制限があるものと考えられる。

3.1.3 二次述語となる場合

変・様格名詞句は、他動詞節では目的語と、自動詞節では主語と意味的な叙述関係を結ぶ「二次述語 (secondary predicate)」となることがある。Maslova (2003a: 126) は、変・様格名詞句が他動詞節において「目的語に関して連想される役割・用途を表す」と述べているが、二次述語用法の変・様格名詞句は自動詞の主語とも結びつきうる今回のコーパス調査で明らかになった。(5) は他動詞節の、(6) は自動詞節の例である。

- (5) a. qojdid'āje-pul qoj-n numö-pe-gele t'umu sovetskej-pe **titte-l'e=ñōn**
priest-PL god-GEN house-PL-ACC all Soviet(Rus.)-PL 3PL-SBST=TRNSFESS
min-ñā
take-PL.TR.3
「司祭たちの教会をすべてソビエト政権が自分たちのものとして奪った」(Maslova 2001: 139)
- b. taŋ titte martl'uö-gele ködiel-ñin tadi-l'el-ñā, **terike-d=ōn**
that 3PL.GEN daughter-ACC wolf-DAT give-INFR-PL.TR.3 wife-POSS.3=TRNSFESS
「(彼らは) 自分たちの娘をオオカミに与えた、彼の妻として」(Nagasaki 2023: 3)
- c. tiŋ šöjl **jōdeje=ñōn** min-te-j
this stone toy=TRNSFESS take-FUT-TR.1PL
「この石をおもちゃとして持っていこう」(Nikolaeva 1989a: 82)
- d. tintaŋ šāl mibe-de-gen t'ine-delle, **losil=ñōt**
aforementioned tree root-POSS.3-PROL chop-SS.ANT firewood=TRNSFESS
piede-t-u-k
burn-CAUS-E-IMP.2SG
「その木を根元から切り倒して、(それを) 薪として燃やせ」(Nikolaeva 1989a: 86)

- (6) a. *tiŋ köj-ŋin terikə-d=ōn qon.*
 this man-DAT wife-POSS.3=TRNSFESS go(IMP.2SG)
 「その男のところへ彼の妻として行け」(Nikolaeva & Mayer 2004: 11-17)
- b. *pochtal'on=ŋōn uj-l'el.*
 postman(Rus.)=TRNSFESS work-INFR(INTR.3SG)
 「(彼は) 郵便配達人として働いていた」(Nagasaki 2023: 101)

これらの例では、目的語／自動詞主語と二次述語となる変・様格名詞句との間に「前者の指示対象が後者の表す役割をもつ」という叙述関係があり、その叙述関係が事象時点 (point of event) (Reichenbach 1947)、つまり節の表す事態が発生する時点と同時に成立するということが表されている。例えば、(5a) において「司祭たちの教会がソビエト政権のものとなった」のは、「ソビエト政権が司祭たちの教会を奪った」ときであり、(6a) において「お前 (=発話者の妻) がその男の妻となる」のは、「お前がその男のところへ行く」ときである。

(7) も自動詞節の例であるが、ここでは主語の変容した姿が変・様格名詞句によって示されている。これらの例でもやはり、主語の変化は事象時点と同時に生じていると理解される。

- (7) a. *uōŋō-d'ōn=ŋōt tā l'e-j tet terike.*
 be.young-PTCP:NMLZ=TRNSFESS there exist-INTR.3SG 2SG wife
 「若返ってそこにいた、お前の妻は」(Nagasaki 2023: 26)
- b. *tude-n'e kel-u-l šoromo-pul t'umut ajbī=ŋōt*
 3SG-COM come-E-AN person-PL all shadow=TRNSFESS
pollod'i-ŋi.
 be.born.ITER-PL.INTR.3
 「彼と一緒に来た人間たちは皆、霊になって生まれた」(Nikolaeva 1989a: 110)

二次述語となる変・様格名詞句の生起位置は述語動詞の直前であることが多いが、(5b) のように述語の後に置かれる例や、(7a) のように変・様格名詞句と述語動詞の間にほかの構成素が挟まれる例もある。この点において、自動詞 *kude-*「なる」あるいは他動詞 *ā-*、*nugede-*、*uji-*「する、作る」の項となる変・様格名詞句とは統語的なふるまいが異なる。

3.1.4 数概念を表す句に現れる場合

数概念を表す名詞句に変・様格接語が現れることがある。「順序」「集合」「数量」の3タイプがある。

順序を表すもの

- (8) *əl=šaqałəda-j-l'əl-də-jnə ataq-ləš-t=ōn*
 NEG=get.yellow.PFV-INFR-POSS.3-DS.COND two-ORD-POSS.3=TRNSFESS

jal-məš-t=ōn uj-nunnu-l'əl-ŋā.

three-ORD-POSS.3=TRNSFESS make-HBT-INFR-PL.TR.3

「(彼の体が) 黄色くならなかったら、(彼らは) 2 回目、3 回目を [その治療の 2 回目、3 回目を] 行ったものだ」(Nikolaeva & Mayer 2004: 35-19)

集合を表すもの

基数詞 irki-n 「1 つの」と実質名詞化の -l'e から成る名詞 irki-l-l'e 「1 つのもの」は =(ŋ)ōn および =(ŋ)ōt を伴い、「一緒に」の意となる。

- (9) a. **irki-l-l'e=ŋōt** anil promušl'aj-t nodo promušl'aj-t
one-GEN-SBST=TRNSFESS fish hunt(Rus.)-ss.CIRC bird hunt(Rus.)-ss.CIRC
egūžu-l'el-ŋi.
walk.ITER-INFR-PL.INTR.3SG

「(彼らは) 一緒に魚を獲って、鳥を獲って歩き回っていた」(Maslova 2001: 133)

- b. (...) taŋ pulun-die-gele n'anme is'e-n'e **irki-l-l'e=ŋōn**
... that old.man-DIM-ACC willow tip-COM one-GEN-SBST=TRNSFESS
amladaj-m.
swallow.PFV-TR.3SG

「(そのオオシカは) そのおじいさんをヤナギの葉と 一緒に呑み込んだ」(Nikolaeva 1989a: 66)

数量を表すもの

(10a) のように、基数詞と名詞 šoromo 「人」から成る名詞句に =(ŋ)ōt が付き、主語の指示対象に関連する数量を表す例がある。また、(10b) のように、主語の指示対象がいくつかに分かれる様子を、基数詞と名詞 t'uge 「道」に =(ŋ)ōt を付けて表す例がある。(10c) では、数量を表す動詞の分詞形が名詞を修飾しているが、(10b) の類例と考えることができる。

- (10) a. tamun-gələ **molhā-n šoromə=ŋōt** joŋs'ē-l'-ē-l'əl-ŋā.
that.one-ACC six-GEN person=TRNSFESS hang.bell?-E-INCH-INFR-PL.TR.3
「(彼らは) それ(その木)に 6 人で鈴を付けはじめた」(Nikolaeva & Mayer 2004: 36-21)
- b. šoromo-pul šaqal'ā-delle aŋt'i-jī-t kew-ej-l'-ie-l'el-ŋi,
person-PL gather-ss.ANT look.for-VEN-ss.CIRC depart-PFV-E-INCH-INFR-PL.INTR.3
jā-n t'uge=ōt.
three-GEN track=TRNSFESS

「人々は集まって、(それを) 探すために出発しようとしていた、3 つの道に分かれて」
(Maslova 2001: 135)

- c. erpeje-pul tãhile kereke-pul modo-l'el-ŋi **ninge-j** **nume=ŋõt.**
 Ewen-PL and Koryak-PL sit-INFR-PL.INTR.3 be.many-PTCP house=TRNSFESS
 「エウエンたちとコリャークたちはたくさんの家に分かれて暮らしていた」(Nikolaeva 1989b: 34)

3.1.5 名詞化された動詞に付き、副詞節を形成する場合

変・様格接語が名詞化された動詞に付いた例が 1 例ある。(11) では、動作名詞⁷が変・様格接語を伴っており、動作名詞を述語とする節が上位の節に対する理由を表していると考えられることができる。

- (11) tāt peššej-l'el-ŋā, l'e ō-d=ōn, zhadnyj
 then throw-INFR-PL.TR.3 that.one COP-POSS.3=TRNSFESS greedy(Rus.)
ō-d=ōn.
 COP-POSS.3=TRNSFESS
 「そして(彼らはオオカミを)追い出した、それが [そのオオカミが] あれだったので、それが
がいやしかったので」(Nagasaki 2023: 1)

3.2 ツンドラ・ユカギール語

変・様格の用法には、コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語でいくつかの違いが見られる。その 1 つは、コリマ・ユカギール語では変・様格名詞句が自動詞 kude-「なる」と共起した例が非常に多いのに対し、ツンドラ・ユカギール語では変・様格名詞句が「なる」の意の自動詞と共起した例が 1 例もないことである。このことはまた、ツンドラ・ユカギール語の変・様格接語の用例に自動詞節が非常に少ないことの要因となっている。ツンドラ・ユカギール語では、「主語の変化結果」および「生起した事態」はどちらも起動接辞を伴ったコピュラ動詞 ŋol-ā- の前に置かれた主格（ゼロ格）名詞句によって表されるようである。

- (12) a. tudel me=tett'ie ŋol-ā-j
 3SG AFF=rich.person COP-INCH-INTR.3SG
 「彼は金持ちになった」(Kurilov 2005: 278)
 b. qand'eme ŋol-ā-j
 winter COP-INCH-INTR.3SG
 「冬になった」(Kurilov 2005: 228)

3.2.1 他動詞 wie-「する、作る」の項となる場合

一方、ツンドラ・ユカギール語の変・様格名詞句が「する、作る」の意の他動詞 wie- の項となり、「目的語の変化結果」を表す例は一定数見られる。

⁷動作名詞接辞 -l は子音で始まる接辞が後続する際にほぼ義務的に脱落する。(11) における ō-d=ōn [COP-POSS.3=TRNSFESS] も、3 人称所有接辞 -d (< -de) の前で -l が脱落していると考えられる。

- (13) a. öt'idie en'ie tit-ejlek t'uŋre-gudit'i-ŋi-k. metul jewligi-re,
uncle mother 2PL-INTENS thought-put-PL-IMP.2 1SG-ACC love-SS.COND
köde=ŋol wie-l-bun-de.
person=TRNSFESS make-AN-DES-SS.COND
「おじさん、お母さん、自分たちで考えてください、私を愛しているなら、(私を) 人間 [一人前の人間] にしたいなら」(Kurilov 2005: 426)
- b. taŋ tude akā-pe-hane **qamrī=ŋol** wie-m.
that 3SG.GEN elder.brother-PL-ACC servant=TRNSFESS make-TR.3SG
「(彼は) その自分の兄たちを使用人にした」(Kurilov 2005: 206)
- c. neme-leŋ **murid'e=ŋol** wie-nun-ŋu-mle?
what-FOC needle=TRNSFESS make-HBT-PL-OF.3
「(彼らは) 何で針を作っているのか？」(Kurilov 2005: 216)

(13c) の目的語と変・様格名詞句はそれぞれ「材料」と「作成物」を表すが、コリマ・ユカギール語と同様に、同じ動詞であっても「作成物」が目的語によって示され、「材料」が奪格名詞句あるいは具格名詞句によって示されることもある（さらに、変・様格名詞句を wie- の目的語と見なすことのできる例も存在する。これについては 3.2.5 で取り上げる）。

- (14) a. mit murid'e ewl'e, **murid'e** wie-k
1PL needle not.exist(INTR.3SG) needle make-IMP.2SG
「私たちには針がない [直訳：私たちの針がない]、針を作れ」(Kurilov 2005: 216)
- b. taŋ **murid'e-le** semtenej peldu-die öjege-n t'ohudamun wal' l'e-j
that needle-ACC Semtenei old.man-DIM hare-GEN thigh.bone near exist-PTCP
t'ohune-j amun-hat wie-nul-l'el-u-m
be.thin-PTCP bone-ABL make-HBT-INFR-E-TR.3SG
「針をセムテネイじいさんはウサギの大腿骨のそばにある細い骨で作っていた」
(Kurilov 2005: 246)

目的語の変化結果を表す変・様格名詞句はツンドラ・ユカギール語でも多くの場合、wie-「する、作る」の直前に置かれる。しかし、(15) のように、wie- の直前に目的語が置かれ、その前に変・様格名詞句が置かれた例もある。

- (15) **nime=ŋol** sawaŋ mer=at=wie-ŋ.
house=TRNSFESS fur AFF=HYP=make-TR.1SG
「(私は) テントを [テントの覆いを]毛皮で作っただろうに」(Kurilov 2005: 216)

3.2.2 二次述語となる場合

ツンドラ・ユカギール語でも変・様格名詞句が他動詞節における目的語あるいは自動詞節における主語に対する二次述語となることがある。(16)は他動詞節の、(17)は自動詞節の例である。二次述語となる変・様格名詞句の生起位置はコリマ・ユカギール語と同様に、述語動詞の直前とは限らず、比較的自由である。

- (16) a. tadā tude l'uoluol-ha aduo-gi nū-ŋu-mle t'amadald'e=ŋol.
 then 3SG.GEN substitute-LOC son-POSS.3 find-PL-OF.3 tsar=TRNSFESS
 「そして(彼らは)彼の代わりに彼の息子を皇帝として見出した」(Kurilov 2005: 448)
- b. met-qane met uo-n'eŋ qamril'=ŋol kew-r-ej-ŋa.
 1SG-ACC 1SG child-COM servant=TRNSFESS depart-CAUS-PFV-PL.TR.3
 「(彼らは)私を私の子供と一緒に使用人として連れ去った」(Kurilov 2005: 130)
- c. tude d'i-n' pojuo-l ile-le pun'-i-m,
 3SG people-DAT be.many-AN reindeer-ACC kill-E-TR.3SG
legul-pe-d=uol.
 food-PL-POSS.3=TRNSFESS
 「(彼は)自分の両親のためにたくさんのトナカイを殺した、彼らの食料として」(Kurilov 2005: 200)
- (17) a. el=qodej-l-hane ten'i kelu-l-bun'-ŋi, el'it't'ie
 NEG=not.want-AN-DS.COND here come-AN-DES-PL.INTR.3 not.long
pudinime=ŋol.
 neighbor=TRNSFESS
 「(あなたが)嫌がらなければ、(彼らは)ここに来たがっただろうに、短い間の隣人として」(Kurilov 2005: 148)
- b. t'ulh-aj-l-ha jaba-je=ŋol ū-nu-te-hanek.
 pierce-PFV-AN-DS die-NMLZ=TRNSFESS go-IPFV-FUT-IMP.2SG
 「(私が)突いたら、(お前は) 死人のようにしている」(Maslova 2001: 36)

Maslova (2003b: 62) は、ツンドラ・ユカギール語に関しても「変・様格名詞句は、実体の意図された役割(用途)を表す」、また、「確認されたすべての例で、意図された役割をもつ実体は、O [目的語] の示す参与者である」と述べ、他動詞節における二次述語用法の存在を指摘しているが、コリマ・ユカギール語と同様に、二次述語用法の変・様格名詞句が自動詞主語とも結びつきうることは明らかである。

3.2.3 数概念を表す句に現れる場合

ツンドラ・ユカギール語においても、数概念を表す名詞句が変・様格接語を伴うことがある。ただし、「順序」を表すものに限られ、「集合」を表す例、「数量」を表す例は見られない。

- (18) **jal-mast'e-gi-n=uol** wāj mer=ōre-te-m.
three-ORD-POSS.3-GEN=TRNSFESS also AFF=indicate-FUT-TR.3SG
「[3つの家族が1つのテントを作らなければならない] (彼は) 3つ目も [それらの家族の3つ目も] 指示するだろう」 (Kurilov 2001: 109)

3.2.4 名詞化された動詞に付き、副詞節を形成する場合

変・様格接語が名詞化節に付き、副詞節を形成しているとする例が1例ある。以下の例では動作名詞 (-l) が変・様格接語を伴っており、これを述語とする節が上位の節に対する目的を表していると解釈することができる。

- (19) **apanalān** **jaqt-ā-reŋ** **mon-i,** **el'in** **arū-n** **nide-l=ŋol**
old.woman sing-INCH-SS.SIM say-INTR.3SG firstly word-GEN tell-AN=TRNSFESS
mon-i ...
say-INTR.3SG
「おばあさんは歌い出してから言った、(彼女は) まず言葉を [祝いの言葉を] 述べるために言った」 (Kurilov 2005: 432)

3.2.5 目的語となる場合

ツンドラ・ユカギール語には変・様格名詞句を他動詞の目的語と見なすことのできる例がある。このような例の存在は Maslova (2003a: 62) でも指摘されているが、詳しい説明はない。目的語用法の変・様格名詞句は、ここまでに見たいくつかの用法の変・様格名詞句と関連をもつ。

まず、他動詞 **wie-** 「する、作る」の項となる変・様格名詞句は「作成物」を表すことがあり、その際には通常、目的語が「材料」を表すが (3.2.1 の (13c) を参照)、(20a) と (20b) に見るように、「材料」を示す目的語が節中に現れず、また、文脈からもそれが明らかでないことがある。このとき、変・様格名詞句は **wie-** の目的語であると見ざるをえない。(20c) のように「材料」が奪格名詞句によって示されることもある。他動詞 **wie-** 目的語となる変・様格名詞句には、その内部に人称代名詞あるいは3人称所有接辞によって所有者が明示されるという共通点がある。

- (20) a. **lew-de-llek** **tude** **n'andawj=uol** **wie-nā-m**
eat-DETR-SS.ANT 3SG.GEN bow=TRNSFESS make-INCH-TR.3SG
「(彼は) 食事をしてから、自分の弓を作りはじめた」 (Maslova 2001: 43)
b. **goruop-pe-d=uol** **wie-te-mek,** **lukul-pe-d=uol**⁸
coffin(Rus.)-PL-POSS.3=TRNSFESS make-FUT-TR.2SG land-PL-POSS.3=TRNSFESS
「(お前は) 彼らの棺を作れ、彼らの [彼らの遺体の] 場所を」 (Kurilov 2005: 354)

c. *taɲul-lek titte sukun=uol wie-m öjege rawa-hat.*
that.one-INS 3PL.GEN thing=TRNSFESS make-TR.3 hare fur-ABL

「それから（彼女は）自分たちの衣服をウサギの毛皮で作った」（Kurilov 2005: 246）

次に、他動詞節における変・様格名詞句は二次述語として目的語との間に、「目的語の指示対象が変・様格名詞句の表す役割をもつ」という叙述関係を結ぶことがあるが（3.1.3、3.2.2を参照）、節中に「役割をもつ存在」だけが変・様格名詞句によって表され、それと叙述関係を結ぶ対象を文脈から特定できないことがある。このときもやはり、変・様格名詞句を目的語と見なさざるをえない。(21a)の変・様格名詞句が表すのは「話し手の妻になるはずの誰か」であって、事象時点の前には、そのような役割をもつものは存在しない。(21b, c)においても、「仲間となるはずの誰か」「私たちが食べるはずの何か」は「探しに行く前」「見つける前」には存在しない。このような例でもほとんどは、変・様格名詞句に所有者が明示される。例外は(21b)であるが、この例でも *wal'hare*「仲間」の所有者は主語の指示対象（「自分」）であることが文脈から理解される。

(21) a. *met mirij=uol ket'i-te-m*

1SG wife=TRNSFESS bring-FUT-TR.3SG

「（彼は）私の妻となる者を連れて来るだろう」（Kurilov 2005: 282）

b. *tuɲ gode tāt l'e-reɲ wal'har=uol want'i-t'-ā-m.*

this person like.that exist-ss.SIM half=TRNSFESS look.for-VEN-INCH-TR.3SG

「その人はそうしていて、仲間となる者を探しに行こうとした」（Maslova 2001: 28）

c. *mit legul=uol me=nugu-ɲ*

1PL food=TRNSFESS AFF=find-TR.1SG

「（私は）自分たちが食べるための物を見つけた」（Kurilov 2005: 62）

なお、以上で見た変・様格名詞句と類似する意味が、前望（prospective）を表す形式名詞 *moraw* を伴った名詞句によって表されることがある。例えば、以下の(22)では *moraw* を伴った名詞句は「叔父になる者たち」、つまり「ある役割をもつようになる存在」を表している。統語的には、この名詞句は他動詞 *it'uo-*「見る」の主格（ゼロ格）目的語である。変・様格名詞句と *moraw* を伴った名詞句との違いは今のところはっきりしないが、少なくともこの例では、「ある役割をもつようになる存在」が事象時点においてすでに存在している。

(22) *tadāt taɲ tude qawd'ā-pul moraw-pe it'uo-relek, tude*

then that 3SG.GEN younger.brother.of.mother-PL PRSP-PL look-ss.ANT 3SG.GEN

⁸この例は述語の後に置かれた変・様格名詞句を述語の前に置かれた変・様格名詞句を言い直したものを見なして和訳したが、「（お前は）彼らの棺を作れ、彼らの〔彼らの遺体が眠る〕場所として」のように、2つ目の変・様格名詞句を1つ目の変・様格名詞句に対する二次述語と解釈することも可能である。

lame-pe lajuden kew-e-t'.

dog-PL to depart-PFV-INTR.3SG

「そして（彼は）その自分の叔父になる者たちを見てから、自分の犬のところへ去った」
(Kurilov 2005: 270)

名詞化された動詞が変・様格接語を伴う場合にも、それが目的語となっていると見なすことのできる例がある。(23a, b) では、動作名詞 (-l) が変・様格接語を伴っている。また、(23c) では、結果名詞 (-uol) に前望 (prospective) を表す形式名詞 moraw が続き、それが変・様格接語を伴っている。3.2.4 の (19) のような副詞節となる場合と目的語となる場合との違いは、前者では名詞化されるのが事態であるのに対して、後者では道具、方法、対象といった事態の参加者が名詞化される点にあるのかもしれない。

- (23) a. elil-l'e t'ijit'el-njin' mit t'i-pe qad'ir **mit āwā-l=uol**
firstly-SBST night-DAT 1PL people-PL INTJ 1PL sleep-AN=TRNSFESS
me=wie-ŋa.
AFF=make-PL.TR.3

「最初の夜までに、私たちの両親は私たちの寝床を用意した」(Maslova 2001: 55)

- b. e **met jaba-l=uol** met want'i-r ewre-jen.
INTJ 1SG die-AN=TRNSFESS 1SG look.for-SS.CIRC walk-INTR.1SG

「自分の死に方を私は探して歩いている」(Maslova 2001: 42)

- c. e, aqun tet, **tet lew-juol moraw-l=uol** quodir
INTJ at.all 2SG 2SG eat-RN PRSP-E=TRNSFESS why
el=want'i-nun-k?
NEG=look.for-HBT-INTERR.2SG

「いったいお前は、自分の食べるためのものをなぜ探さないのか？」(Kurilov 2005: 373)

3.2.6 対比の意味を伴う場合

ツンドラ・ユカギール語では変・様格名詞句が対比の意味を伴うことがある。目的語用法の場合と同様に、対比の意味を伴う場合も変・様格名詞句に所有者が明示される。(24) は他動詞節の例である。(24a) の前半の節は、聞き手に対して「自分の分の食べ物」を取るように促す命令文であり、後半の節では、「残りの食料」を話し手がどのように処置するかが述べられている。(24b) では、食事に際して、「彼の分の食器」だけが用意されたことが述べられているが、この節は「他の人の分」は置かなかったという状況を含意している。

- (24) a. ten'it men'-k **tet legul=uol**, met mārqađ'en lew-nunu-ŋ.
from.here take-IMP.2SG 2SG food=TRNSFESS 1SG once eat-HBT-TR.1SG

「ここから [狩りの獲物である野生トナカイの死体から] 取れ、自分の食べ物を。(残

りは) 私が一度で食べてしまうだろう」(Kurilov 2005: 144)

b. sawha-le **aq tude-l'=uol** keje-da-ha kudere-ŋa.
dish-ACC only 3SG-SBST=TRNSFESS before-POSS.3-LOC put-PL.TR.3

「[彼らは食事の支度をした] 食器を、彼の分だけは彼の前に置いた」(Kurilov 2005: 172)

(25) は自動詞節の例である。話し手が、2 人の兄によって母親の形見がすべて取られてしまったことを見て、言うセリフであるが、やはり「兄たちの分」に対して「自分 (=話し手自身) の分」が対比されている。

(25) akā, **met-l'=uol** wāj qol-l'e?
elder.brother 1SG-SBST=TRNSFESS again where-exist(INTERR.3SG)

「兄よ、私の分はいったいどこにあるのか？」(Kurilov 2005: 372)

対比の意味を伴う変・様格名詞句の統語的な働きについては、判断がつかないところがある。まず、(24b) では目的語 sawha-le 「皿を」が変・様格名詞句とは別に節内に明示されており、両者の間に「皿が彼の分である」という意味的な叙述関係がある。よって、この変・様格名詞句は目的語に対する二次述語と考えるとよさそうである。(24a) と (25) についても、変・様格名詞句が意味的な叙述関係を結ぶもの、つまり、「野生トナカイの死体」と「母の形見」は先行する文脈から明らかであるが、(24a) ではそれが、指示副詞 ten'it 「ここから」によって示されており、(25) では節中に現れていない。これらを統語的な目的語あるいは自動詞主語と位置付けることができるかどうかは、今後この言語の統語論をさらに考察する中で明らかにしたい。

4 まとめ

本稿ではユカギール諸語の変・様格接語の用例を検討し、その用法を明らかにした。コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語のそれぞれで確認される用法は表 3 のとおりである。

表 3 変・様格の用法

		KY	TY
[1]	「なる」の意の自動詞の項となる	✓	—
[2]	「する、作る」の意の他動詞の項となる	✓	✓
[3]	目的語／自動詞主語に対する二次述語となる	✓	✓
[4a]	数概念を表す句に現れる 順序	✓	✓
[4b]	— ” — 集合	✓	—
[4c]	— ” — 数量	✓	—
[5]	名詞化された動詞に付き、副詞節を形成する	✓	✓
[6]	目的語となる	—	✓
[7]	対比性を表す	—	✓

変・様格接語は全体として多様な用法、言い換えれば多様な機能と意味をもつが、コリマ・ユカギール語とツンドラ・ユカギール語との間では守備範囲に違いがある。大きな違いは、[1]「なる」の意の自動詞の項となるか否か、[4b, c] 数概念を表す句に現れた際に「集合」の意味や「数量」の意味を表すか否か、[6] 目的語となるか否か、[7] 対比性を表すか否かという点にある。また、[6] と [7] をもつツンドラ・ユカギール語では、変・様格が一方で示差的目的語標示現象の、もう一方で情報構造標示現象の一端を担うと言える。

本稿における記述のまとめに加えて、最後にユカギール諸語の変・様格接語と類似の機能と意味をもつ、近隣の諸言語における名詞の屈折形式に触れておくことにする。

Dunn (1999: 114) によると、チュクチ語の等格 (equative) は、自動詞主語または目的語に対する二次述語となる名詞句やコピュラ動詞の補語となる名詞句に現れるという。Zhukova (1972: 121–122) は、チュクチ語の等格と同根の格形式を “naznachitel’nyj padezh (destignativ)” と呼び、いくつかの例を挙げている。それらを見る限り、この格は「なる」の意の動詞と共起して、変化結果を表す名詞句に現れたり、「働く」「呼ぶ」などの意の動詞と共起し、主語あるいは目的語に対する二次述語となる名詞句に現れたりしている。

第2節で述べたように、フィンランド語などのウラル語族の諸言語は様格と変格という2つの格をもち、様格は一時的な役割や状態を表す二次述語として機能し、変格は様格に比べ、動的な意味をもつという。この言語では、ユカギール諸語の変・様格の用法の一部を担う、別々の格形式が存在するということになる。

Janda et al. (2022: 902) は、ネネツ語などの北サモエード諸語の “destinative”、“predestinative” あるいは “benefactive” と呼ばれる屈折形式に言及している。それによると、まず、この形式は通時的には他のウラル諸語の変格と繋がりをもつものの、共時的には対格などの格と共起するため格とは見なされないという。また、これは常に所有接辞の前に現れ、その指示対象が名詞の受益者、受け手、意図された使用者であることを示す働きをもつという (ツンドラ・ネネツ語: n’ie-da-r’ [woman-DST-POSS.2SG] 「お前の未来の妻」)。

風間 (1999) およびその英語版である Kazama (2012) によると、エウエン語、オロチ語、ウデヘ語、ナーナイ語、ウイルタ語など、ツングース諸語のいくつかには “designative” (指定格) と呼ばれる格があり、常に所属人称接辞を伴って「所属人称の指示対象のために予定されたもの」を表すという。同論文はまた、Novikova (1960/1980) によるエウエン語の記述を基に、指定格名詞句が統語的には直接補語、間接補語、自動詞主語として機能すると述べた上で、指定格をとった名詞句は「発見、獲得、作成、追求」もしくは「授与、運搬、設置」などの意味をもつ他動詞、および「新たな出現」の意味をもつ自動詞と共起しやすいことを指摘している。

このように、本稿で明らかにしたユカギール諸語の変・様格接語もつ多様な機能と意味は、他の北東ユーラシア諸言語の名詞屈折形式にも部分的に見られるものであり、より詳細な対照研究、および、類型論的な研究へと発展させることができるものと考えられる。

略号

1/2/3: first person/second person/third person, ABL: ablative, ACC: accusative, AFF: affirmative, AN: action nominal, ANT: anterior, CAUS: causative, CIRC: circumstantial, COM: cominative, COND: conditional, DAT: dative, DES: desiderative, DETR: detransitive, DIM: diminutive, DS: different subject, E: epenthesis, FOC: focus, FUT: future, GEN: genitive, HBT: habitual, HYP: hypothetical, IMP: imperative, INCH: inchoative, INFR: inferential, INS: instrumental, INTENS: intensifier, INTJ: interjection, IPFV: imperfective, LOC: locative, NEG: negative, NMLZ: nominalizer, OF: object focus, ORD: ordinal numeral, PFV: perfective, PL: plural, POSS: possessive, PROL: prolative, PROP: proprietive, PTCP: participle, RN: result nominal, SBST: substantivizer, SG: singular, SIM: simultaneous, SS: same subject, TR: transitive, TRNSFESS: transformative-essive, VEN: venitive

参考文献

- Dunn, Michel John. (1999) *A Grammar of Chukchi*. (A thesis submitted for the degree of Doctor of Philosophy of Australian National University).
- Janda, Gwen Eva, Johanna Laakso, and Helle Metslang. (2022) Person marking. In: Marianne Bakró-Nagy, Johanna Laakso, and Elena Skribnik (eds.) *The Oxford Guide to the Uralic Languages*, pp.894–903. Oxford: Oxford University Press.
- Jochelson, Waldemar. [Iokhel'son, Vladimir] (1900) *Materialy po izucheniju jukagirskogo jazyka i fol'klora, sobrannye v kolymskom okruge*. Sankt-Peterburg.
- 風間伸次郎 (1999) 「ツングース諸語における指定格について」『語学研究所論集』4: 51–79.
- Kazama, Shinjirō. (2012) Designative case in Tungusic languages. In: Andrej L. Malchukov and Lindsay J. Whaley (eds.). *Recent Advances in Tungusic Linguistics* (Turcologica 89), pp.123–152. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Kittilä, Seppo, Johanna Laakso, and Jussi Ylikoski. (2022) Case. In: Marianne Bakró-Nagy, Johanna Laakso, and Elena Skribnik (eds.) *The Oxford Guide to the Uralic Languages*, pp.879–893. Oxford: Oxford University Press.
- Krejnovich, E. A. (1958) *Jukagirskij jazyk*. Moscow/Leningrad: Nauka.
- Krejnovich, E. A. (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Kurilov, G. N. (2001) *Jukagirsko-russkij slovar'*. Novosibirsk: Nauka.
- Kurilov, G. N. (2005) *Fol'klor jukagirov*. Moscow/Novosibirsk: Nauka.
- Maslova, Elena. (ed.) (2001) *Yukaghir Texts*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Maslova, Elena. (2003a) *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin & New York: De Gruyter Mouton.
- Maslova, Elena. (2003b) *Tundra Yukaghir*. Munich: LINCOM EUROPA.
- Nagasaki, Iku. (ed.) (2023) *Kolyma Yukaghir Texts*. (Materials of Siberian Languages 8). Nagoya: Nagoya University.
- Nikolaeva, Irina. (ed.) (1989a) *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, I. Yakutsk: Yakut State Univer-

sity Press.

Nikolaeva, Irina. (ed.) (1989b) *Fol'klor jukagirov Verxnej Kolymy*, II. Yakutsk: Yakut State University Press.

Nikolaeva, Irina. (2024) The Yukaghir language family. In: Edward Vajda. (ed.) *The Languages and Linguistics of Northern Asia, Language Families*. pp.307–364. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

Nikolaeva, Irina and Thomas Mayer. (2004) *Online Documentation of Kolyma Yukaghir*.
<https://typo.uni-konstanz.de/yukaghir/index.html>

Novikova, K. A. (1960/1980) *Očerki dialektov evenskogo jazyka: Ol'skij govor*, vol. 1-2. Moscow/Leningrad: Nauka.

Reichenbach, Hans. (1947) The tenses of verbs. In: Maria Reichenbach. (ed.) *Elements of Symbolic Logic*, pp.287–298. New York: the Macmillan Company.

Zhukova, A. N. (1972) *Grammatika korjaskogo jazyka: fonetika, morfologija*. Leningrad: Nauka.

Transformative-Essive Case in Yukaghir Languages

Iku NAGASAKI
(Nagoya University)

This study describes the functions of the transformative-essive case in Kolyma Yukaghir (KY) and Tundra Yukaghir (TY). On the basis of an analysis of corpus data from the two languages, it is shown that transformative-essive phrases in each language exhibit the functions summarized in Table 1.

Table1 The functions of the transformative-essive case

		KY	TY
[1]	appears as the argument of the verb ‘become’	✓	—
[2]	appears as the argument of the verb ‘do, make’	✓	✓
[3]	appears as the secondary predicate of an object or an intransitive subject	✓	✓
[4a]	appears in a phrase expressing a numerical concept: ordinal	✓	✓
[4b]	— ” — collective	✓	—
[4c]	— ” — quantity	✓	—
[5]	forms an adverbial clause	✓	✓
[6]	appears as a transitive object	—	✓
[7]	appears in an NP with contrastive meaning	—	✓

Overall, the transformative-essive case displays a wide range of functions across the Yukaghir languages. At the same time, the two languages differ in the distribution and functional scope of this case. In Kolyma Yukaghir, unlike in Tundra Yukaghir, a transformative-essive NP can occur as the argument of the verb ‘become’ and can be used in phrases expressing collective and quantity concepts (functions [1] and [4b, c]). By contrast, in Tundra Yukaghir a transformative-essive NP may function as a transitive object and may carry a contrastive interpretation (functions [6] and [7]). These facts suggest that in Tundra Yukaghir the transformative-essive case is partially integrated into the systems of differential object marking, on the one hand, and information structure, on the other.